

令和5

## 小論文 A

〔180点  
50分〕

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、白紙を除いて、4ページあります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答は、〔令5 解答用紙〕に記述しなさい。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

**問題** 次の文章を読んで、後の問い(問1～問3)に答えよ。

マニユアル力は、「答えがある」「正しい手順が決まっている」という場面では素晴らしい威力を發揮します。こうした条件が満たされているシチュエーションでは、マニユアル力の高い人は、誰よりも効率よく成果をあげることができるでしょう。ところが、学問の世界や実社会に出ると、こうした場面は限られてしまいます。

たとえば、営業活動。お得意さん回りならば、先輩や上司から引き継いだ知識や慣習で対応できます。このような局面では、マニユアル力の優れた人が顧客に安心感と信頼を与え、優秀だと見なされます。

ところが、新たな顧客開拓、新規プロジェクトへの賛同を得るといった局面ではどうでしょうか。ここでは、マニユアルでは済まない企画力や創造性、相手を説得するコミュニケーション

ケーション力が必要になってきます。さらに不測の事態が起きたときには、杓子定規なルールはむしろ邪魔になってしまうことさえあります。

商品開発ならば、他の人が気づかないことを思いつく創造力が重要で、これなしでは多くの人々に支持されるサービス・製品は生み出せません。こうした製品を次々に世に送り出したアップルの創業者、ステイブ・ジョブズがスタンフォード大学卒業式で学生たちに送った言葉は、“Stay hungry, stay foolish.”でした。食欲で愚直に夢に立ち向かうことで、マニユアルにこだわらない斬新な発想や世間の常識にとらわれないアイデアが生まれ、新しいモノを創り出すきっかけになるというメッセージです。

顧客が求めているものに応えるにはマニユアル力で足りるかもしれませんが、大きなマーケットを開拓するには顧客がまだ意識すらしていないニーズを創造する必要があります。

ビジネスだけではありません。学問の世界も同じです。新しい発見をするためには、明確な「答え」や「正解」にたどり着くマニユ

アル」のない未知の荒野に勇氣と好奇心を持って踏み出さなくてはならないのです。

マニュアル力はたしかに社会においても有効ではありますが、それだけで優位に立てる場面は限られています。マニュアル力に優れた人が高く評価されるのは、ルールや枠組みがはつきりしている「想定内」の世界です。しかし、この能力だけではイノベーションを生み出すことはできません。それどころか、「すぐに答えが出ない問題にとりかかるのは非効率だ」として、イノベーションにつながる方向への努力を避けてしまうことも多いのです。一生懸命受験勉強をした結果、無意識にそのような姿勢が身につけてしまうケースは決して少なくありません。

私は、たとえ非効率に見えても「考える」ことでしか生み出せない価値、発見は無限にあると考えています。もしマニュアル力にだけ頼っていたら、自分自身が潜在的に持っている可能性を眠らせてしまうことにもなりかねないのです。

#### (小見出し略)

今、日本は「創造性の時代」に入った、と私は感じています。

高度経済成長を経て、この国では日常生活や社会活動を営むためのシステムが整備されてきました。その結果、たいいていのは定められたマニュアルに従うか、前例を参考にすれば解決できる、いわば「マニュアルの時代」に突入しました。このような社会では、前例を重んじ、マニュアルとルールをきちんと学ぶことで、効率良く生き抜くことができます。マニュアルを逸脱することは非効率なことだったのです。

しかし、現代の日本では、経済・政治・医療・産業などあらゆる分野で、これまでのマニュアルでは解決できない問題が山積しています。マニュアルが古くなってしまったのです。こうした時代に、従来のシステムやルールに拘泥するとらわるのはむしろ非効率です。マニュアルだけでは乗り切れない新しい社会の状況に対応するためには、本当の意味での「考える力」を鍛え、「創造する力」を

身につけることが必要です。

ここでいう「考える力」とは、単に与えられた問題を解く能力ではありません。他の人が疑問に感じないところ、常識と考えているところに問題点を見出し、根本にまでさかのぼって問題の本質を突き止める能力です。諦めずに考え続けることができる能力と言ってもいいかもしれません。このような能力は、30分考えても分からなければ次の問題に移れという訓練をしていると身につかないことが分かりますね。それとは逆に、納得がいくまでとことん考え続ける粘り強さが必要なのです。

さて、そのようにして根本にまでさかのぼった問題には、あらかじめ用意された一通りに決まった答えなどありません。この時点では、答えは存在しないのです。この答えのないところにあなた独自の答えを編み出すことができる能力こそが、ここでいう「創造する力」なのです。「創造する力」を持った2人の人が同じ問題に取り組むと、二通りの「正解」が生まれるという点がポイントです。ファッションデザイナーを想像すると分かりやすいかもしれません。

つまり、(中略)「考える力」とは問題の本質を見極める力であり、「創造する力」とはそれをあなた独自の方法で解決に至るまでやり遂げることができる能力です。(中略)

そんな芸当は、(中略)生まれつきの天才だけができるとだと思われるかもしれませんが。しかし、そうではないのです。私のこれまでの教育経験から、「考える力」と「創造する力」は、意識的な訓練をすることによってだれでも身につけることができると断言できます。

「A考える力」は「Bマニユアル力」の基礎の上に成り立ち、「C創造する力」は「考える力」がなくては成立しません。特に、「考える力」と「創造する力」は表裏一体の能力なので、これらをまとめて議論するときには「自ら考え、創造する力」ということとなります。

(上田正仁『東大物理学者が教える「考える力」の鍛え方』ブックマン社、二〇一三、二七〜三二頁、による。一部改変。)

**問1** 傍線部「イノベーション」とはどういったものであると筆者は考えているか、文中の言葉を用いて二五〇字以内で説明せよ。  
〔七〇点〕

**問2** 二重線部 A 考える力、B マニュアル力、C 創造する力の関係を読み取り、次の文の空欄をA～Cの記号で埋めよ。〔三〇点〕  
( 1 ) ( ) は ( 2 ) ( ) の基礎であり、( 3 ) ( ) は ( 4 ) ( ) に不可欠である。( 5 ) ( ) と ( 6 ) ( ) はまとめて論じるものとする。

**問3** 出題文を受けて、あなたは本学学校教育学部入学後、どのように学業に取り組まねばならないと考えるか、二五〇字以内で述べよ。〔八〇点〕